

# 音楽(科)教育学の構造について

## －山元文茂氏の見解に関する再考察－

片岡啓一

### はじめに

私は以前、「音楽科教育学の構造について－山本文茂氏の見解をめぐって－」という論文<sup>1)</sup>を書き、音楽科教育学の構造についてそれ以前に私自身が抱いていた見解と山本氏の見解を対比させつつ、氏の提言について種々の考察を行ったことがあった。その際の氏の提言内容の基本的な文献は、「教科教育学の成立条件－人間形成に果たす教科の役割－（東洋館出版社 1990）」であり、その中に氏によって、「音楽科教育学の成立をめざして－人間形成に果たす音楽科の役割－」という論題のもとに、音楽科教育学研究の歩みを踏みしめながら、一方では同書に掲載された他の研究者達の提言をも参考にしつつ、建設的な見解が披露されていた（pp. 112－116）。私はその考察を通して、従来の私自身の見解が氏の見解と多くの点で照応し、しかもそれは、私の見解より細かい点に至るまで具体的に整理され深められており、極めて説得力の高いものであることを確認したのであった。

私は、同論文の内容について、「平成3年度日本音楽教育学会四国地区例会」（1992年2月22日 於鳴門教育大学）で研究発表を行ったが、その際の質疑応答の中で、鳴門教育大学の長島真人氏より、発表の趣旨には賛成であるが、山本氏の見解における音楽科教育学の構造図式ははまだ充分なかたちで有機的に構造化されたものではないと思うとのご指摘があり、私は、長島氏の意見については私も同じことを感じるが、そのことに関しては何よりも山本氏自身が最も強く自覚していると想像され、今後10年～20年といった長期間にわたる多くの人々の研究の積み重ねを通じて同学の確立が真の意味で実りあるものとなってゆくのではなかろうかと思うといった返答をしたのであった。

その後、山本氏による著書、「音楽教育研究の方法と分野」（音楽之友社 1992）が出版され<sup>2)</sup>、わが国における音楽（科）教育学の確立を求めた氏の研究の集大成的内容が同書を通じて紹介された。同書で述べられている内容は、「教科教育学の成立条件－人間形成に果たす教科の役割－」中に書かれている氏の提言と殆ど同じものであるが、何とんでも1個人による著作であることから、内容は当然より詳細で、かつ氏の見解の背景にある基本的な考え方等もはっきりと理解できる感じがする。

今回の研究では、主として「音楽教育研究の方法と分野」の内容を基本的なよりどころとしつつ、長島氏によって指摘された問題点等も含めて、山本氏の見解についての再度の検討・考察を行い、それに基づいて、私自身の音楽（科）教育学の構造図の試案を提示してみたいと思う。

---

1)徳島大学総合科学部紀要 人文・芸術研究篇 第5巻 pp. 63－75 1992

2)「音楽教育研究の方法と分野」は、正確には、1992年10月25日 に第1刷が発行されている。

## 第I章 「音楽教育研究の方法と分野」の概要について

考察の手順として、まえもって「音楽教育研究の方法と分野」の内容の説明を本章で簡単に行っておきたい。

氏は「まえがき」において、本書執筆のねらいは、「音楽教育学」を確立させるための「音楽教育研究のメタ理論」即ち「音楽教育研究についての研究」の形成にあるとしている。

そして本論は4つの章から構成され、第1章では、ドイツにおける音楽教育研究の状況が、第2章では、アメリカにおける音楽教育研究の状況が、そして第3章では、日本における音楽教育研究の状況が説明され、終章では、それまでに述べられた内容に基づいて、わが国における音楽教育学の確立に向けての著者自身の見解が披露されている。

本書の一番最後の「あとがき」の部分では、「まえがき」に照応するかたちで、本書のねらいは2つあって、1つは、これから音楽教育を学問的に研究しようと思っている人々のために広く研究の動向を知るための材料を提供すること、もう1つは、日本の音楽教育学の確立に欠くことのできない音楽教育研究のメタ理論を提起することであると述べている。

ここで本論の内容を若干立ち入って説明しておくことにする。

第1章の「ドイツにおける音楽教育研究」は、4節から構成されている。

1の「研究の伝統」では、ドイツ語圏における音楽教育研究の方法論的展開は、「音楽教授学」(Musikdidaktik)と「音楽教育学」(Musikpädagogik)の2つの方向の相互関係のもとに発展してきており、ComeniusやHerbartを経て、両学は歴史的にも相当の重みを有しているので、わが国における音楽教育研究を「学」として成立させるための基本的視座をドイツからどう学んでいくかが極めて重要な問題となってくることを著者は指摘している。又ドイツでは、音楽教育学の分野の方法論は、実験的方法(empirischer Ansatz)、歴史的方法(historischer Ansatz)、広義の精神史的方法(geistgeschichtlicher Ansatz)の三者として形成されてきており、それらは相互に関連を保ちながら、なお一方で競合する傾向をも示していることが説明されている。そして、それに引き続いて、前記の3つの方法論…3つ目の「精神史的」については、それを内省(Reflexion)という言葉でも表現している。…の視点から1970年までの音楽教育関係の博士論文の分類が行われ、それと並行して、同論文群の、基底論・発達論・教育課程論・授業論・音楽教育家研究といった5つの視点からの分類も行われている。

2の「博士論文にみる研究の分野」では、1971年から1981年までのドイツにおける音楽教育関係の博士論文が、前記と同様の2つの方法で分類されており、各論文の具体的な論題の紹介も行われている。

3の「研究団体の動き」では、旧西ドイツの音楽専門団体のリストに基づいて、「音楽教育学」(Musikpädagogik)という名詞あるいはその形容詞を含んだ5つの団体が紹介説明され、その中で、1972年に設立された「音楽教育学研究会」(Arbeitskreis Musikpädagogische Forschung)を、純粹に学的な研究成果を蓄積してきた団体として著者は重視している。

4の「ドイツ音楽教育学の大綱」では、ドイツ音楽教育学会の巨星、Sigrid Abel-Struthによる大著、「音楽教育学大綱」(Grundriß der Musikpädagogik 1985)の内容についての説明が行われ

ている。即ち本書は、音楽授業の実施に対して、実践的音楽教育学の立場から直接の支援をしようといった意図を持つものではなく、むしろ学的音楽教育学の立場に立ち、「音楽による教育的交流」を基本にすえて、その全体像を知識として獲得することをねらいとしていることが説明され、「音楽学習」・「音楽指導」・「音楽授業」の三者を中核として複雑で難解な論述が展開されているこの書物は、わが国音楽教育学の確立のためには極めて重要なものであることを山本氏は強調している。

第2章の「アメリカにおける音楽教育研究」は、5節から構成されている。

1の「研究の概観」では、「全米音楽教育者協議会（Music Educators National Conference）その他の機関から発刊されている専門誌や文献目録等の紹介が行われ、アメリカは、音楽教育研究の量においてはドイツをはるかにしのいでいることが指摘されている。又アメリカでは、音楽教育研究全体を概観するためには「教育研究百科事典」（Encyclopedia of Educational Research）というのがある、その中の「音楽教育」の項目の内容を通して、アメリカにおける音楽教育研究には、心理学的研究と教育学的研究とが相互補完的に共存しており、哲学的・美学的論考や歴史的・社会学的洞察が希薄であることがわかる旨の説明が行われている。

2の「方法論的思考の焦点」では、Choate、Cady、Sidnell、Phelps、Carlsenの5つの文献を順を追って紹介し、それを基に、アメリカにおける音楽教育研究の方法論的焦点の根底にあるのは、「歴史的方法」・「記述的方法」・「実験的方法」・「哲学的方法」の四者であることを指摘している。

3の「博士論文にみる分野と方法」では、まず最初に音楽教育博士論文について「基底論研究」・「発達論研究」・「教育課程論的研究」・「授業論研究」の4分野に従って、1977年までの研究の概観が行われ、引き続き1977年から1986年までの同博士論文の状況が説明されている。

4の「専門誌の動向」では、アメリカにおける音楽教育研究の専門誌として4誌が紹介され、山本氏はその中で、「音楽教育研究ジャーナル」（Journal of Research in Music Education）を、最も歴史が古く、組織が大きく、内容が豊富であるとして、同誌を重視し、その内容分析を行った結果、記述的・実験的研究は豊富だが歴史的・哲学的研究は少ないこと、文献情報は著しく充実していること、確実な測定用具が整備していること等がわかる旨説明を行っている。

5の「アメリカ音楽教育学の系譜」では、アメリカにおける音楽教育学研究の流れが年代順に5種類の書物（群）によって示され、その説明の後にドイツの「音楽教育学大綱」に相当するような本格的な音楽教育学の書物はアメリカではまだ書かれていないことが指摘され、その理由として、山本氏は、大学テキストの形式の書物の限界と隣接諸学との連携不足、そして、研究のメタの欠落（音楽教育研究の成果を学問の体系として組織するための基本的条件を追求する姿勢がアメリカ全体に希薄であること）の3つをあげている。

第3章の「日本における音楽教育研究」は、5節から構成されている。

1の「研究の動向」では、最初にわが国における基本的文献目録が紹介され、その中では「国際音楽文献目録」（Répertoire International de Littérature Musicale）の国内版（通称 RILM 国内版）が最も便利であることから、その内容を分析し、掲載内容についての著者の見解が述べられている。

2の「方法論的思考の焦点」では、わが国における音楽教育研究の歴史が方法論の視点から紹介され、それについての山本氏自身の見解が集約的なかたちで述べられている。

3の「学会誌論文の傾向」では、日本音楽教育学会の学会誌「音楽教育学」の創刊号から第19-1号までに掲載された論文の、量的傾向・著者の所属・論文の依拠性・研究対象・発表形態・研究の分野・研究方法・研究の領域についての分析的な説明が行われ、それに引き続いて、歴史的方法・記述的方法・実験的方法・哲学的方法における優秀な論文の紹介があり、更に、今後の課題として、形式面と内容面の2側面から優れた論文の条件を付して、研究の質的レベルを高めるための努力を研究者に対して要請している。

4の「修士論文の傾向」では昭和63年度までに完成された修士論文について山本氏がその傾向を分析し、それに基づいて同研究に関する課題をまとめている。

5の「教科教育学研究の動向と課題」では、わが国における教科教育学研究の歴史について言及し、昭和20年代を黎明期、昭和30・40年代を模索期、昭和50・60年代を準備期としてとらえ、今後は、教科教育学の基本構想と統一的視座を確立し、その視点に従って、先行諸研究の知見を確実に継承し発展させることが大切であると主張している。

終章の「本邦音楽教育学の確立に向けて」は、2節から構成されている。

1の「本邦音楽教育学の構想」では、音楽教育学の成立条件として、5つの構成要素…①学的性格・②研究対象・③研究方法・④分野・領域・⑤構造・位置…をあげ、その関係を図式的に説明し、この5つの要素についての著者の見解を述べ、同見解の集大成としての音楽教育学の構造を図式的なかたちで提言している。

2の「今後の課題と展望」では、著者は、わが国の音楽教育学が本当の確立期を迎えるための後続研究者の研究への情熱と継続的な努力を要請している。

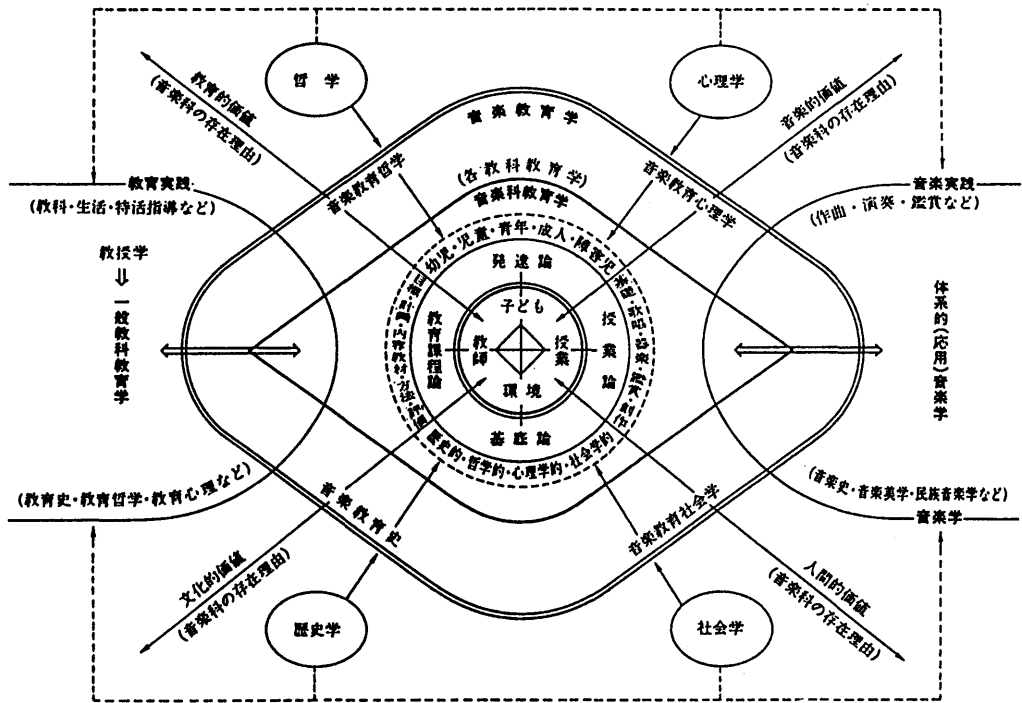
## 第二章 山本氏が提言した音楽（科）教育学の構造について

山本氏の著書、「音楽教育研究の方法と分野」の終章の p. 248には、音楽教育学の構造が氏の同学に関するある意味では集大成とも思えるかたちで図式的に提言されている。この図式は、「教科教育学の成立条件」の p. 114に示されたものと殆ど同じである…ほんの少しの変化は認められる。…が、同図を参考までに掲載しておきたい。(図①)

この図式に対して、私は、注1の論文（「音楽科教育学の構造について—山本文茂氏の見解をめぐって—」）において、その時点において、若干の疑問点を指摘しつつも、同氏の見解に殆ど全面的に賛成する気持ちを表明していた。その後幾年かを経た現在、氏の見解には絶大なる敬意を表しつつも、私自身の揺れ動く思いを今ひとたびすなおに見つめながら、この図式について現在私が感じたり考えたりすることを、同図の中心部から周辺部に向けて逐一検討してみようと思う。

中央部の ㊦ 印は、音楽(科) 教育学の中核を形成する中心概念であり、山本氏は同概念として「人間形成」を考えていると思われる。ただこの部分の「人間形成」は、正確に言うと「人間教育に果たす音楽科の役割」という意味での人間形成であり、他分野あるいは他教科が果たす人間形成の役割はここには含まれない。そしてこの中央部を更に具体的に図式化したものが、(既に注1の論文の p. 67でも紹介したが、)「音楽教育研究の方法と分野」の p. 246の図式であると思われる。(これは、注1

図① 音楽教育学の構造



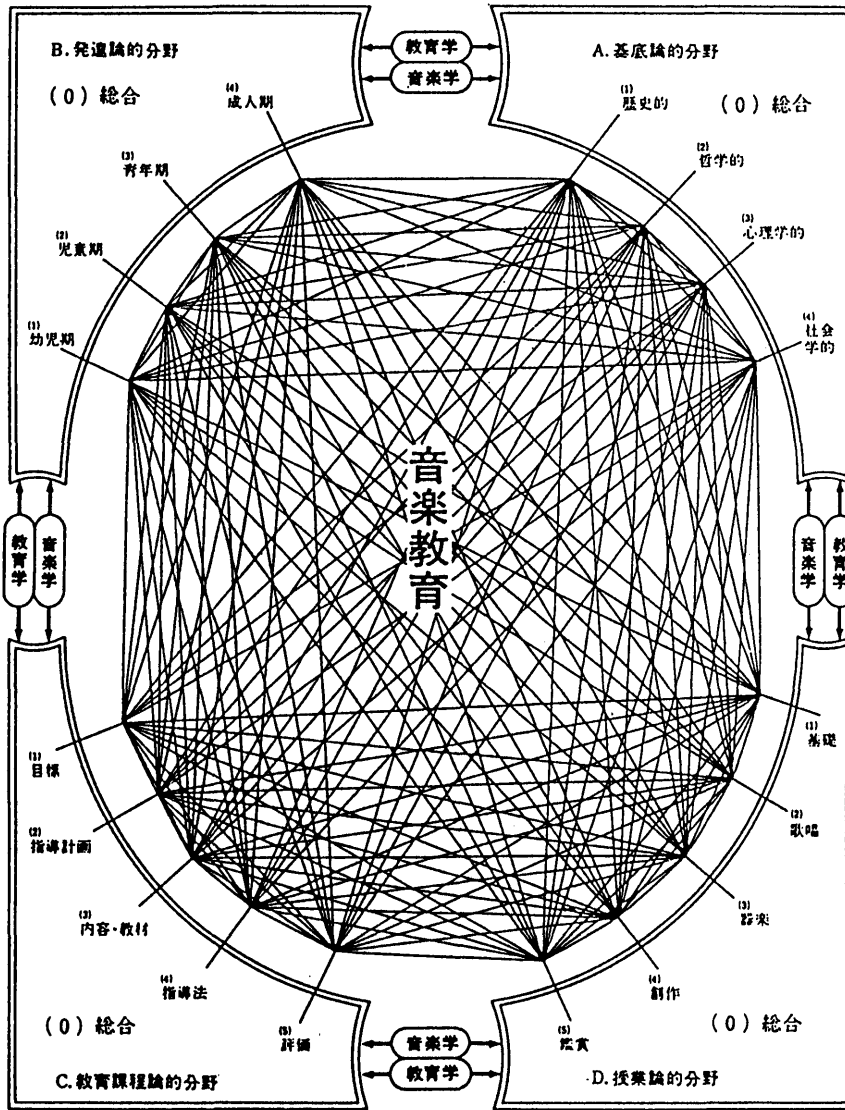
の論文の図式と殆ど全く同じであるが、「～論的アプローチ」という表現が「～論的分野」という表現になっており、それぞれの分野に「(0) 総合」が加えられている。(図②)

私は、注1の論文において、図②を図①の中核部と考えた。即ち、音楽（科）教育学の中核部は、子ども（発達論的分野）・教師（教育課程論的分野）・授業（授業論的分野）・環境（基底論的分野）の諸項目から形成される網目模様から成るダイナミックで開放的な世界であるとの認識を持った。それぞれの分野が、内側が「音楽学」、外側が「教育学」によって並列的に関係づけられているが、内側が「音楽学」で外側が「教育学」であるのは、多分教育学の土台のもとに音楽学が作用するという考えが背景にあると思われる。ただ、これを図①に照応させるためには、図②を図③のかたちに訂正すべきであると思われる。その際、基底論的分野の（1）歴史的（2）哲学的（3）心理学的（4）社会学的の順序は、「歴史的」を「歴史学的」に訂正して、（1）哲学的（2）心理学的（3）歴史学的（4）社会学的の順序に訂正しておいた。この件については、後の論述で言及することにする。(図③)

ここで図①と図③を比較してみると、図①では教育学が左側に音楽学が右側に位置しており、図③とはその点で照応しない。これは、音楽（科）教育学なるものは、一方では教育学、他方では音楽学から常に答えを問い求める学的性格を中核部として有していることからすると、どちらの図も内容的には異ならないが、ある意味では図式的な異動が生じるのもやむをえないことと思われる。

一方、音楽（科）教育学の研究分野は、両図では、発達論（子ども）・教育課程論（教師）・授業論（授業）・基底論（環境）の4つとなっている。これは、山本氏の学的立場あるいは氏の見解の土台

図② 音楽教育研究の分野と領域…音楽（科）教育学の中核部…

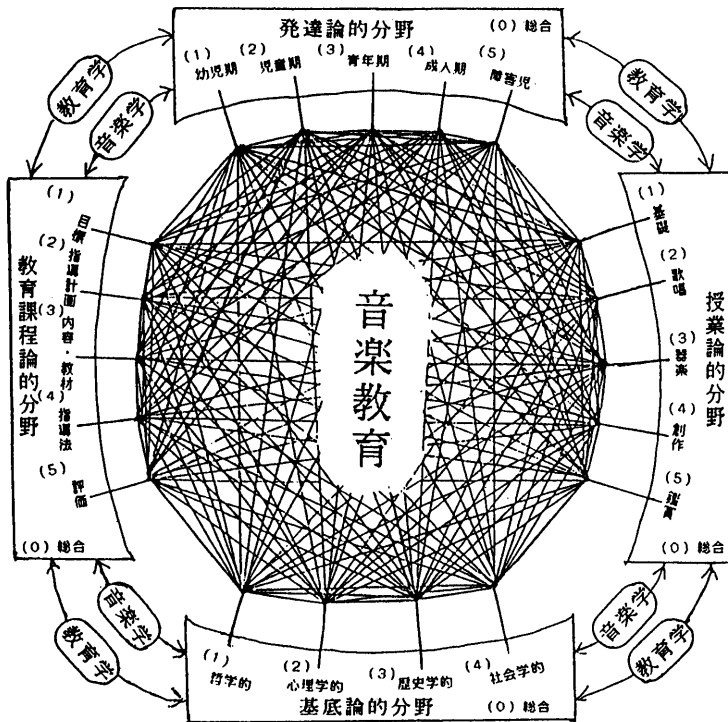


となっている高久清吉氏の構造図式<sup>3)</sup>のことを考えると極めて自然で強い説得力を有したものであると思われる。

ただ、「音楽教育研究の方法と分野」の p. 69 に図式的なかたちで掲載されている Abel-Struth : 「大綱」(1985) の音楽教育学体系では、中核部分は、音楽学習 (Musik-Lernen) ・音楽指導 (Musik-Lehren) ・音楽授業 (Musik-Unterricht) の三者となっており、基底論的分野 (環境) については、その3分野の枝葉の部分の一部として分散させているかたちをとっている。即ち、音楽 (科) 教育学は、何ととっても音楽教育実践そのものを中心として、それに照応させるかたちで構成されるべきで

3) 高久清吉著「教授学－教科教育学の構造－」の p. 163 を参照。

図③ 音楽（科）教育学の中核部



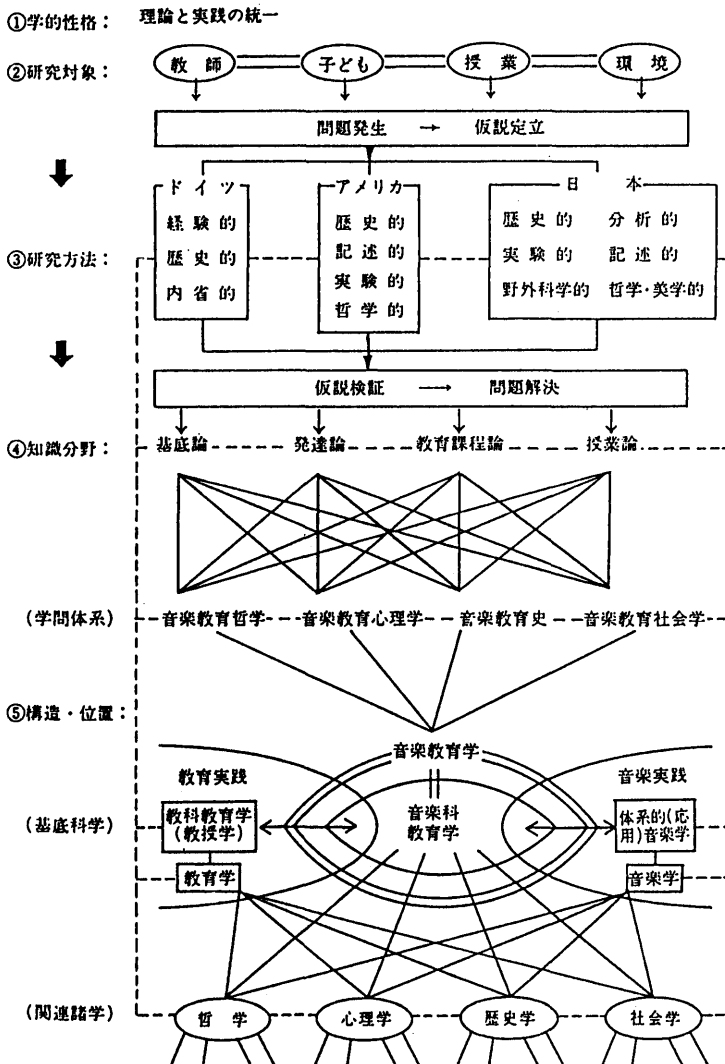
あるという気持ちが Abel-Struth の見解には感じられ、このような実践そのものを重視すべきであるという学的立場は、いろんなかたちでわが国の研究者にも存在しているようである<sup>4)</sup>。

4) 松井三雄氏は、日本音楽教育学会編「音楽教育学の展望」（音楽之友社 1979）の p.12 で音楽教育学の構造図私案を提示し、その中核部に音楽教育実践を置き、周辺部を理論で囲む見解をとっている。あるいは、山本文茂氏の大恩人である浜野政雄氏は、日本音楽教育学会編「音楽教育学の展望 II（下）」（音楽之友社 1991）の p.323 で次のようなことを述べている。…私は「20年の歩み」で学会の創立当初を回顧して「学会がこんなに立派に育つとは思ってもみなかった」と書いたが、毎年の学会に参加して、学会当日若い方々が続々とつめかける様子を見ると嬉しさと共に驚きさえある。また学校において大学院の学生たちに接していて、若い学生諸君が学会で発表される学問的研究に大きな魅力を感じとっていることも知っている。（改行）しかし発足当時から参加している者としていささか危惧することは、その研究が学問的にも立派になってきている一方、発足当時の初心からはなれてややもすると教育の実践面から遊離し勝ちではないかということだ。（改行）学会は多くのすぐれた論文、発表を世に送り出してひとつの時代を画することができた。ここでは初心に還って実践との結びつきをもう一度考えてみる必要があるではなからうか。それが20年の業績を踏まえて、新しい時代の研究に意義ある方向づけをすることになるのではないだろうか。…又、山田淺蔵氏は、音楽教育における実践の世界を重視して、「実践音楽教育学」という著書（音楽之友社 1991）を刊行しているし、西園芳信氏は、その著書「音楽科カリキュラムの研究－原理と展開－」（音楽之友社 1993）の pp.26-27 において、研究方法の中に「実践的研究方法」が必要であることを主張し、その点において、山本氏の見解を批判している。

私としては、注4に示したような諸見解を注視しつつも、結局のところ、山本氏同様、基底論的分野を他の3分野と対等のかたちで配置する見解に同意したい気持ちが強い。これは、音楽教育における理論と実践の両世界はお互いの立場を鮮明に自覚することによって真の実りが得られるとする同氏の見解に近いものを、私自身も有しており、他の3分野と基底論的分野は、質的・次元的に異なっているのではないかというある種の懸念は否定しきれないとはいえ、それを山本氏の考える配置以外の方法で具体的に提示する発想は現時点での私には浮かんでこないし、ここに基底論がなければ片手落ちの感は免れないのではないか、ここに基底論がくることによって、むしろ実践の世界をより正確なかたちでみつめる視点が確立されるのではないかという点については、多分殆どの人が同様の見解を抱くであろうと想像されるからである。

ここで山本氏の図式の中央部を基本的なところで承認した上で、更に細かい点について言及してゆ

図④ 音楽教育学研究の構成要素



きたいと思う。氏は、基底論の外側に、歴史的・哲学的・心理学的・社会学的という4つの項目を左から右にかけて配置しているが、この配置の順番は、あえてこだわるとするならば、哲学的・心理学的・歴史学的…歴史学的を歴史学的に訂正する。…社会学的の順番に変更した方がよいと思う。後者の順番にした方が人間の内省的な側面から社会的広がりを示す視点への移動が自然に感じられるし、山本氏自身、「音楽教育研究の方法と分野」のp.239の図式（音楽教育学研究の構成要素）においてその発想が認められるからである。（図④）

それから、発達論・教育課程論・基底論・授業論の外側の点線による円形の細分化された項目の外側に、更に点線の円形を設け、4



分野のそれぞれに「総合」という言葉を入れた方がよいであろう。これは、図②の「総合」の発想を図①にも付加した方がより丁寧で適切であると思われるからである。

一方、前述した部分の外側には「音楽科教育学」、更にその外側に「音楽教育学」という言葉が見られるが、これについては、「教科教育学の成立条件—人間形成に果たす教科の役割—」の p. 114の図式では、それぞれの言葉に対応するかたちで、「Research in School Music Education」・「Research in Music Education」という表現が記入されていた。それが、図①では英語表現は用いられていないかたちに修正されており、その点は好ましいことだと思われる。私は、注1の論文の p. 71で、「学」の概念規定の問題を合わせ考えた時、Research という言葉自体は厳密な視点からすると「学」という言葉に照応しないように思われるので、図式の中に英語表現は用いない方がよいのではないかということを描き添えておいた。山本氏自身も多分同様のことを感じて、図①で英語表現を中止したと考えられる。それは、「音楽教育研究の方法と分野」の p. 82における、同氏の英語表現に関する説明とか、同書の p. 149における、(…これは既に前章で言及したことであるが、…) アメリカにおいては音楽教育研究の成果を学問の体系として組織するための基本的条件を追求する姿勢が全般的に希薄であるといった指摘によって、充分裏付けられることであると考えられる<sup>5)</sup>。

又、図①の「音楽科教育学」の枠の外側の4つの隅には、「音楽的価値」(右上)・「教育的価値」(左上)・「文化的価値」(左下)・「人間的価値」(右下)という言葉が、それぞれ「音楽科の存在理由」という言葉(括弧付き)と共に配置されている。それらはそれぞれ↔印を用いて中核部と周辺部の対話関係を示すかたちで配置されており、私は、注1の論文の p. 69で、その内容及び配置には細かい配慮が感じられると述べ、賛同の意を示したのだが、配置の方法に関しては、現在はむしろ、「音楽的価値」・「教育的価値」・「文化的価値」・「人間的価値」は、それぞれ「授業論」・「教育課程論」・「基底論」・「発達論」に対応させて配置した方がよいのではないだろうかと思えるようになった。即ち、「音楽的価値」は右側に、「教育的価値」は左側に、「文化的価値」は下方に、「人間的価値」は上方に配置した方が、図式としてわかりやすく、有機的なニュアンスも増加するよう感じられる。

それから、「音楽教育学」の枠の外側には、関連諸学(「哲学」(左上)・「心理学」(右上)・「歴史学」(左下)・「社会学」(右下))が中心に向けての→印で示されていて、その矢印の途中に「音楽教育学」の枠の中に「音楽教育哲学」・「音楽教育心理学」・「音楽教育史」・「音楽教育社会学」が配置されている。この外側の関連諸学と内側の基底論の学問分野が全く同一であり、このある種の二重構造をどう理解したらよいのか、これは私が先に述べた、中核部に基底論を置くべきか否かという問題とも直結しているのだが、このある種の二重構造は結果論的にそのようになったと理解すべきで、これはこれ

5)塚本靖彦氏は、日本音楽教育学会の学会誌「音楽教育学 第24 -1号-」に掲載された論文「日本の音楽教育学・音楽科教育学成立への克服されるべき構造部分—学的アプローチへの一考察—」(pp. 47-58)の pp. 47-48において次のようなことを書いている。…なお、音楽教育学のアメリカや英国圏での用語は、もっぱら(Research in Music Education)であり、音楽科教育学については(Research in School Music Education)であるから、後者は、学校制度の範疇で把握されていることになる。発生史的にみても始めから「学」が付く性格のものではなく、伝統的用語法なのであろう。それに、その実際内容や研究方法がリサーチという語感なのであろうと思われる。…

でかまわないのではないかという気持ちを私は有している。ただ配置の方法については、外側の心理学と哲学は、それぞれ左右を逆にして、時計の逆回りの方向配置が基底論の訂正した配置と対応するようにした方が図式としては整ったものになるであろう。なお、「音楽教育史」という言葉は、他の表現に対応させて「音楽教育史学」という言葉にした方がよいと思われる<sup>6)</sup>。

そして又、「音楽（科）教育学」の枠の左側は「教育学」、右側は「音楽学」の世界が配置され、それが⇔印で対話しているかたちが示されている。この図式のうち、多分単純ミスと思うが、左のコの線の下側のところに「教育実践」に対応する「教育学」が記入されていないので、ここはそれを記入すべきであろう。又、「教授学」という言葉と「一般教科教育学」という言葉が↓印で上下の位置に配置されているが、これは、図④にならって配置及び書き方を訂正した方がよいであろう。ただ、「一般教科教育学」の「一般」という表現はかなり浸透していると思われるので、その言葉はそのまのかたちで使った方がよいと思われる。p. 239の図式では、関連諸学が、「音楽科教育学」と共に「教育学」と「音楽学」にもつながっており、それが間接的に、「教科教育学」・「体系的（応用）音楽学」を経て音楽（科）教育学に作用する側面もあることを示している。この点については、図④でも同様のイメージを抱くことができるので、修正の必要は殆どないように思われる。又、音楽科教育学の外側には「(各教科教育学)」という言葉が配置されているが、これを入れるならば、「(個別教科教育学)」と訂正して、それを「音楽科教育学」の下（内側）に記入すべきであるし、それに合わせて「音楽教育学」の下にも「(個別教育学)」という言葉を入れた方がよいであろう。ただ図④は、あくまでも音楽（科）教育学の構造図なので、この2つの言葉は、むしろ記入しない方が誤解を招かなくてよいのではないだろうか。

最後に図④では、「音楽科教育学」・「音楽教育学」の枠が菱形に近いかたちで書かれている。これは、左右の教育学と音楽学の世界との図式的交差を考慮した場合、このかたちにした方が書きやすいという利点があってこのようにしたのであると思われるが、この菱形に近いかたちは円形に修正した方が構造図としての有機的イメージが増すのではなからうか。

以上、私はこれまで山本氏の提言した図④の内容について、諸々の他の見解等も参考にしつつ検討・考察を行ってきた。その結果私がこれまで考えてきたことは、基本的な点においては図④をそのまま踏襲したものになってはいるが、とにかく私の本論文の結論を、前記の諸点を集約するかたちで図⑤として提示しておくことにしたい。それは、図④に比べると、少なくとも構造図としての有機的なニュアンスを増加させ、全体としてより一層整然とした体裁になっていると私自身は考えている<sup>7)</sup>。

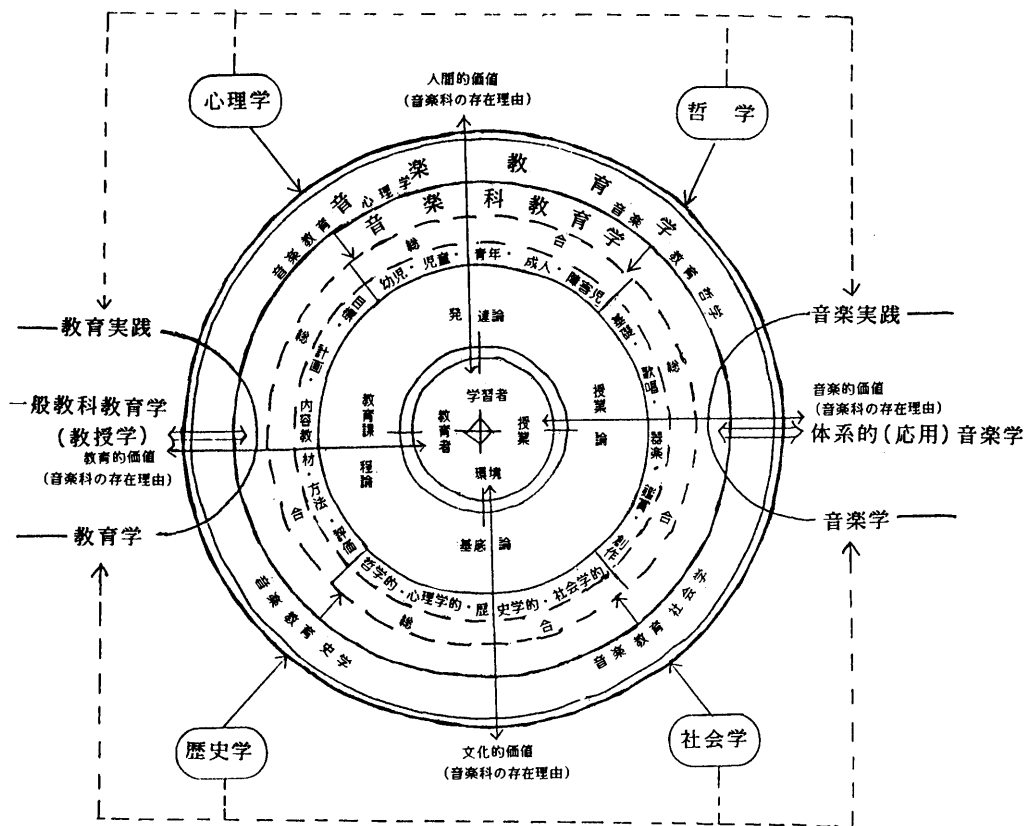
(図⑤)

---

6) 同様のことで、図④の中の「教育史」は、「教育史学」に、「教育心理」は「教育心理学」に、「音楽史」は「音楽史学」に訂正した方がよいであろう。

7) 図④の中核部の山本氏による「子ども」・「教師」という表現は、大変わかりやすく適切だとは思いますが、厳密に考えると「子ども」は「学習者」に訂正し、それに対応する言葉として「教師」は「教育者」という言葉に訂正した方がよいのではないかと思ったので、図⑤においてはそのような表現に訂正しておいた。

図⑤ 音楽（科）教育学の構造…片岡試案…



### おわりに

今回は、山本氏の音楽（科）教育学の構造の提言をよりどころとしつつ、それを踏襲しながら、本論の終りの部分で私の考える音楽(科)教育学の構造図を図⑤として提示したわけであるが、音楽(科)教育学の構造については、平面図的な表現では、この先図⑤が大幅に変更されることは私の心の中で多分起こることはないような気がする。

ただ将来的に考えられることは、同学の構造は有機的でダイナミックな生命体のイメージが強いので、構造図自体を立体図的に作成し直すことである。私の心の中では、同学の構造はずっと以前から球体のイメージであった。しかしながら現時点においては、それを説得力のあるかたちで立体的に図式化する能力は私にはないので、この問題については将来の検討課題にしたいと思っている。

### 主要参考文献

(以下の文献中には、当論文の中で言及しなかったものも含まれているが、それらは私自身目を通したもので、今回の研究内容に直接的あるいは間接的に関係している。)

- ・徳丸吉彦：音楽教育研究ノート 音楽之友社 「音楽教育研究」 第48号-59号 1970-1974
- ・高久清吉：教授学-教科教育学の構造 協同出版株式会社 1974

- ・ 供田武嘉津：音楽教育学 音楽之友社 1975
- ・ 浜野政雄：新版音楽教育学概説 音楽之友社 1976
- ・ 星旭：音楽教育学の展望 音楽之友社 「季刊音楽教育研究-春-」 11号 pp.120-121 1977
- ・ 筆者：音楽教育学が学として成立するための条件についての一考察 徳島大学学芸紀要 教育科学 第28巻 pp.111-126 1979
- ・ 松井三雄：音楽教育学の研究 日本音楽教育学会編 音楽之友社 「音楽教育学の展望」 第一章 pp.5-25 1979
- ・ Roger Phelps 著 山本文茂・加藤富美子・佐藤みどり・浜松敦子共訳：音楽教育研究入門 音楽之友社 1984
- ・ 瀬戸郁子：音楽教育研究における哲学と科学主義の相互反転のバランス 日本音楽教育学会誌「音楽教育学-第15号-」 pp.40-51 1985
- ・ Nelson B. Henry 編 美田節子訳：音楽教育の基本的概念 音楽之友社 1986
- ・ 中嶋恒雄：音楽教育学の現状と課題-学会誌刊行15巻の鳥瞰を通して- 日本学校教育学会編 東進堂 「学校教育研究1-新しい学校教育への道-」 pp.162-171 1986
- ・ Bennett Reimer 著 丸山忠璋訳：音楽教育の哲学 音楽之友社 1987
- ・ 東洋他編：教科教育学の成立条件-人間形成に果たす教科の役割- 東洋館出版社 1990
- ・ 山田淺蔵：実践音楽教育学 音楽之友社 1991
- ・ Malcolm Tait・Paul Haack 共著 千成俊夫・竹内俊一・山田潤次共訳：音楽教育の原理と方法 音楽之友社 1991
- ・ 浜野政雄：新しい時代の音楽教育研究にむけて-実践の現状を踏まえて- 日本音楽教育学会編 音楽之友社 「音楽教育学の展望 II (下)」 第14章<21世紀の音楽教育学研究にむけて>の第2節 pp.314-325 1991
- ・ 筆者：音楽科教育学の構造について-山本文茂氏の見解をめぐって- 徳島大学総合科学部紀要 第5巻 人文・芸術研究篇 pp.63-75 1992
- ・ 山本文茂：音楽教育研究の方法と分野 音楽之友社 1992
- ・ 西園芳信：音楽科カリキュラムの研究-原理と展開- 音楽之友社 1993
- ・ 塚本靖彦：日本の音楽教育学・音楽科教育学成立への克服されるべき構造部分-学的アプローチへの一考察- 日本音楽教育学会誌 「音楽教育学 第24-1号-」 pp.47-58 1994

## On the Structure of Music–Pedagogy (as Subject in School) – a Second Study of the Opinion of Mr. Humishige YAMAMOTO –

Keiichi KATAOKA

Previously, I wrote a paper “音楽科教育学の構造について－山本文茂氏の見解をめぐって” (Journal of the Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima, Humanities, Tokushima, Japan pp.63–75 1992). In the paper, I investigated Mr. Yamamoto’s structure-diagram of music-pedagogy (as subject in school), and compared it with one of myself. Through the study, I could confirm that the opinion of Mr. Yamamoto was very persuasive and it would be a very important theoretical-base for the future development of this learning, and my previous opinion corresponded to Mr. Yamamoto’s one in many respects.

After that, the book “音楽教育研究の方法と分野” written by Mr. Yamamoto was published on the 25th of October in 1992, which showed the compilation of his study about the problems for the construction of music-pedagogy (as subject in school). The contents of this book are very much similar to his opinion which I investigated in the study “音楽科教育学の構造について－山本文茂氏の見解をめぐって”, and they are more detailed, more well organized and can be more clearly understood than his previous studies.

In this paper, I investigated the contents of the book adjusting the focus of his construction-diagram of music-pedagogy (as subject in school), and I showed my tentative plan on the construction-diagram of music-pedagogy (as subject in school).

My plan is fundamentally one which follows Mr. Yamamoto’s opinion, but I think that it is more organized and it has a more dynamic image than his structure-diagram.

However, as my construction-diagram is written in the form of a plane figure, I should like to construct the diagram in the form of a three-dimensional picture.